

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2014年11月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



中土井鉄信の「地域一番の繁盛塾になるための最強法則」 vol.33

< 来季に向けた準備を! >

私どもマネジメント・ブレイン・アソシエイツ (MBA) では、10月から12月まで、来期のコース設計の単発コンサルを行っています。色々面白いものがありました。過去の色々なしがらみで20年も同じ設計で行っているものや良かれと思った改革がまるで逆方向のもの、塾長の思い入れが強すぎて、間口を狭めているものまで、実に様々なものでした。正直言って、これではなかなか生徒が集客できないなあと思うものが大多数でした。

ですから、今回は、設計について、皆さんに、説明してみたいと思います。しかし、色々な地域的な制約があるので、一般論として書きたいと思います。もし、来期が不安であるなら、お問い合わせください。設計に関する単発コンサルは12月まで受け付けていますので。

設計に関しては、3つの視点が重要です。この3つの視点については、セミナーでも私どものメルマガ「塾経営の戦略・戦術」でも何回となく取り上げていますので、ご存知の方もいらっしゃると思いますが、もう一度挙げておきます。

- ① 利便性
- ② 投資性
- ③ 効果性

1. 利便性

集客を考える時に、一番重要な視点が利便性です。この視点が設計の中にないと、人は集まりません。

利便性というのは、別な言葉で言い換えれば、物理的制約条件を考慮して、生徒や保護者が通塾しやすいようにしようということです。学校が終わっていないのに、授

業がスタートしても、生徒は誰も来ませんよね。そういうことに配慮して、授業の始まる時間を考えようとか、授業の曜日が、1週間に5日もあれば、誰も来たくないように、塾の時間以外にも考慮をしようということです。

ちなみに、小学生なら、中学受験をしないクラスは、19時前には終了していること。中学生なら部活動の時間に配慮して、なるべく来やすい時間から初めて、22時には、帰宅させようということです。これは、通塾回数と指導教科数にも関係してきます。通塾回数が少なくて指導教科数が多ければ、利便性は高まります。手軽に指導が手に入りやすいということです。

次に授業料です。あまりにも高いものは、この時代、間口を狭めます。小学生なら公文の授業料・学研教室の授業を意識してください。中1・2年なら2万円の壁を意識してください。個別指導で、週1回でいくらなのか、ここもポイントです。これは次の投資性の視点とも絡んできますが、ここでは、間口問題として考えてください。週1回1万円を超えている個別指導の塾は、リーズナブルな料金に見せる工夫が必要になってきます。手に入りやすいという視点、これが利便性です。

2. 投資性

投資性というのは、どのくらいコストをかけても良いかということです。利便性とも関わってくる問題ですが、主に、肉体的コスト、経済的コストに関する視点です。投資性を別の言葉で言い換えると入試からの距離によって、コストをどのくらいかけられるかという視点です。

ですから、学年によって投資性が違ってくるといえます。講習などの設計の時に、この視点は必要です。学

年によって、入試からの距離は違うのですから、入試からの距離に近い学年＝中3生には、無理がきくけれど、中1には、なかなか無理はきかないということです。学年による設計上の表現の仕方が異なるということです。

3. 効果性

効果性とは、簡単に言ってしまうと、このサービスを受けたら、効果があるかどうかを表現する視点です。

例えば、以前にあった話ですが、1日1時間で5教科指導を行うと銘打ってチラシを打っていた塾がありました。これでは、誰も来ません。そんなこと不可能だと誰もが思うわけです。そして、いくら営業で何人かは強引に入ったとしても、すぐに効果がないのが証明されてしまうからです。「これじゃやっぱり無理だよ」と。

そこで、学校の1時限は、45分から50分ですから、この時間単位以上であれば、ある程度効果は期待できると誰しもが思います。なぜならば、学校の単位だからです。目に見える形で、効果性を表現する視点も設計には重要なことなのです。

以上、簡単に説明してきましたが、来期に受けて、自塾の設計をもう一度点検してみてください。「この設計で、果たしてマーケットは反応するのだろうか」と自問自答を繰り返して、来たるべく未来の準備をしてください。消費税増税は2017年4月まで延期になったようですが（この原稿を書いている時点では確定ではありませんが）、8%の消費税は、非常に家計にとって重たかったです。来年も今年と同じ状況には変わりありません。しっかりと準備をしておいてください。

【あとがき】

私、中土井鉄信が執筆いたしました「成功する個別指導教室 地域一番塾への道」が株式会社塾と教育社様から好評発売中です。個別指導教室を経営・運営されている方はバイブルとして、これから個別指導教室をはじめたいと考えている方には、今後のマニュアルとしてご利用ください。中央教育研究所株式会社様でもご購入いただけます。是非、お手元にお取り寄せください。



公立中高一貫校を受検するには、適性検査を受けなくてはなりません。適性検査は都道府県単位で実施する場合もあれば、東京や京都のように学校単位で出題される場合もあります。受検生がどの程度の知識を有しているかよりも与えられたテーマ、条件を基にしたの問題解決能力がどの程度備わっているのかを重視しています。

算数分野の出題傾向を見ますと、受検生に論理的思考力や数理的に分析し判断する力がどの程度あるのかを確認する問題が目につきます。受検生自身が論理的に思考したことをきちんと表現する(記述する)ことも求めています。単なる問題解決能力だけではなく、どのような道筋から答えを導き出そうとしているのかを見ようとするなど、受検生の解法に至るプロセスに関心を持ち、それに重きを置いているのです。

東京都立桜修館中等教育学校が出した、バスケットボールの試合でのデジタル得点板に表される得点表示についての設問は、その箇所に至るまでも枝問が用意され、それが次の設問を考えるヒントになったり、デジタル表示が0から9までどのように表示されるか、点灯する部分に①から⑦まで番号を振るなどの説明もあり、受検生は実に丁寧に導かれます。与えられた情報を分析し処理する能力があるかがどうか問われているわけです。設問では、試合開始直後にボールがデジタル得点板にぶつかり、デジタル表示が1か所点灯しなくなったという条件が加わります。デジタル表示上では両チーム同点とする表示が3回あったことも指摘されます。手でめくる得点表示では正しくはそれぞれ何点かを、試合の進行状況の表とデジタル得点板の表示の見え方を基に、論理的に考察する力が求められるわけです。受検生がどのように考えているかの思考の過程が読み取れる構成になっています。

岡山県立中学校・中等教育学校の適性検査では、スーパーボールすくいを素材とした設問が出ました。ここでは、ボールすくいに使われる水そうに入っている水の体積を一

定にした場合、水が入っている水そうの底面積と水の高さに関係があることに気づけるかどうかポイントとなります。難易度はそれほど高くはないのですが、「気づき→自分の思考過程→解法」への道筋を適切に表現する力が求められているのです。

広島市立広島中等教育学校では、試験日であった「平成26年1月18日」の $2 \cdot 6 \cdot 1 \cdot 1 \cdot 8$ の5つの数字と数字の間に計算の記号(加減乗除)である $+$ $-$ \times \div や $()$ を使って、計算の式を作る問題を出しています。この設問では、単に式を作るだけではなく、その式がどのようなことを意味しているかを日常的な文章題に落とし込むことを示さなくてはなりません。決して難易度は高くはないのですが、数字に対する感覚を磨いておくとともに、式に具体的な意味を持たせることを日頃から意識して心がけておくことが大事になってきます。

公立中高一貫校の適性検査は私立中学校の入試問題と比べて、難易度は決して高くはないでしょう。単に解けたかどうかではなく、思考の過程をきちんと示すことを求めているところに注目してほしいと思います。公立中高一貫校は、「僕は(私は)こう思います、こう考えます」ということをいつも胸に抱いている受検生を求めているのではないのでしょうか。そして、解決に向けてのアプローチを大事にしようとする出題姿勢は、文部科学省が大学センター試験に代わって2021年より導入予定の「達成度テスト(仮称)」での「学ぶ意欲」を引き出して、国際社会で通用するグローバルな人材を育成していこうというところにも通じているようにも思います。